

清少納言批判

—紫式部日記と源氏物語との隔たり—

Criticism for Sei Shonagon

-Difference of Murasaki Shikibu diary and The Tale of Genji-

瀬戸宏太

SETO Kota

キーワード：紫式部日記、源氏物語、清少納言

Keywords: Murasaki Shikibu diary, The Tale of Genji, Sei Shonagon

紫式部日記は評価しにくい作品だと思う。あの源氏物語の作者による日記、という形容がついてまわるからである。そこではおのずから、日本を代表する古典と釣り合うような内容が期待されていると言うべきだろう。

無論、この日記が源氏物語の作者について知るための、第一等の資料であることは争えない。だから、源氏物語について語るために適当な箇所が、繰り返し引用され強調されるのは、自然なことでもある。ただそれは、ともすると、この日記の価値を源氏物語に従属させようとすることになる恐れがありはしないか。他の日記文学に対するのと同様に、この作品自体を虚心坦懐に見つめようとする時、源氏物語はいかにも大きすぎるのである。

本稿では、そうした問題意識から、この日記と源氏物語との間にある距離を感じ取ることに重きを置いて、解釈を試みる。

標題ともした清少納言批判のくだりを中心に取り上げるのも、それが源氏物語と枕草子という、平安時代を代表する二大作品という前提のゆえに、作品全体の理解から離れて捉えられがちではないかと考えるからである。

紫式部日記における清少納言への辛辣な批判は、それ自体を自己目的としたものではない。道長の榮華の記録者という役割を負わされた紫式部が、道長の価値観のみに収斂していくことに抗うように、いわゆる消息文の部分を展開していく中で、必然的に取り上げられてきたのが、清少納言への言及だったと考える。

清少納言批判

紫式部日記と源氏物語との隔たり

瀬戸宏太

紫式部日記は評価しにくい作品だと思う。あの源氏物語の作者による日記、という形容がついてまわるからである。そこではおのずから、日本を代表する古典と釣り合うような内容が期待されていると言わなければならない。

無論、この日記が源氏物語の作者について知るための、第一等の資料であることは争えない。だから、源氏物語について語るために適当な箇所が、繰り返し引用され強調されるのは、自然なことでもある。ただそれは、ともすると、この日記の価値を源氏物語に従属させようとすることになる恐れがありはしないか。他の日記文学に対するのと同様に、この作品自体を虚心坦懐に見つめようとする時、源氏物語はいかにも大きすぎるのである。

本稿では、そうした問題意識から、この日記と源氏物語との間にある距離を感じ取ることに重きを置いて、解釈を試みたいと思う。標題とした清少納言批判のくだりを中心に取り上げるのも、それが源氏物語と枕草子という、平安時代を代表する二大作品という前提のゆえに、作品全体の理解から離れて捉えられがちなのではないかと考えるからである。

一 批判の文脈

清少納言批判は、和泉式部・赤染衛門への批評に接続して展開さ

れている。有名なくだりで今更めくが、念のため、最初に確認しておく。

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり。歌は、いとをかきこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりるたらむは、いでやさまで心は得じ。口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし。恥づかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず。

丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひはべる。ことにやむごとなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌詠みとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをりふしのことも、それこそ恥づかしき口つきにはべれ。ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み出で、えもいはぬよしほみごととしても、われかしこに思ひたる人、にくくもいとほしくもおぼえはべるわざなり。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほど、よく見れば、まだい

とたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすこうすずるなるをりも、ものあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。

(二〇五〜二〇六頁) (注一)

和泉式部への評価も、赤染衛門に対するよりは辛口と感じられるが、それと比べても、清少納言への批判は辛辣を極めている。こうした叙述の背景に、紫式部の清少納言に対する強烈なライバル意識を読み取りたくなるのは、自然なことだと思う。本稿でも、それを殊更に否定する気はない。華やかな定子サロンを代表する評判の才女である。むしろ、意識することがなかったとしたら、その方が傲慢というものだろう。

ただ、それをあからさまに記述することが、逆に否定的な印象を醸していくことも、当然予想されたのではないか。例えばこれが、彰子の皇子出産を中央に据えた日記の中で語られ、既に清少納言の仕えた定子の死後という地点から披露されていることを知る時、ある種の不快感を覚えるのは、清少納言に肩入れする読者ばかりではないと思われる。清少納言の晩年が実際にどのようなものであったかは必ずしも定かでないが、「そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ」という言葉を、すすんで跳ね返すような立場になかったことは動くまい。そうした現実の力関係を盾に自身の正当性を主張するとしたら、それは文学的省察とは無縁だ。言いもてゆけば道長・彰子方の驕りと照応する、私怨の類であるかのような

印象すら与えかねない。

紫式部は、そんなことにすら気付かずこれを書いたのか。なんの反省もなく、大所高所からこんな書き方をしたのか。

おそらく、そうではあるまい。

少なくとも、このくだりが、そう否定する文脈の中に置かれていると見出すことは、さほど難しくないと思う。この、源氏物語の作者の発言であるがゆえに、大きくクローズアップされて抜き出されることの多い他者批判を、まずは本来の文脈に戻してやることから始めることにしたい。

齋院わたりの人も、これをおとしめ思ふなるべし。さりとして、わがわたりの、見どころあり、ほかの人は目も見しらし、ものをも聞きとどめじと、思ひあなづらむぞ、またわりなき。すべて人もどくかたはやすく、わが心を用ゐむことは難かべいわぎを、さは思はで、まづわれさかしに、人をなきになし、世をそしるほどに、心のきはのみこそ見えあらはるめれ。

いと御覽せさせまほしうはべりし文書きかな。人の隠しおきたりけるをぬすみて、みそかに見せて、とりかへしはべりにしかば、ねたうこそ。

(二〇四〜二〇五頁)

和泉式部を評し始める直前の文言である。

齋院に仕える中將の君が、自分たち以外にもの的情趣を解する者はいないと放言していることに對し、紫式部は憤り、反論を試みている。自分たちの側の非は非として一定程度認めた上で、話をまとめて見せているのが傍線を付した部分だ。人を貶すのは易く、自身

を律するのは難しい。そのことに思いを致さずに他者や世間を批判することを、戒めていると見える。

清少納言への批判は、まさかこの言い分を忘れて展開されているわけではない。むしろ、この言葉が自身にも跳ね返ってくる。そう意識しての批判だと考えるのが、自然だと思う。果たして、清少納言批判に続く一文は、次のようなものである。

かく、かたがたにつけて、ひとふしの、思ひ出でらるべきことなくて、過ぐしはべりぬる人の、ことに行末のたのみもなきこそ、なぐさめ思ふかただにはべらねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひはべらじ。

(二〇六―二〇七頁)

文頭の「かく」という指示語が、どこまで前に遡って届くかは微妙だが、少なくとも直前の清少納言批判を受けていることは確かだろう。そしてそれは、「思ひ出でらるべきこと(なくて)」にかかっていると言うべきである。すなわち、そこまでの批判によって、自身を優越した存在として主張しているのではなく、かえって逆に、みずからをそれらよりさらに一段下位の存在であるかのように展開していくのが、この日記の文脈なのである。

これに関して、秋山虔氏は「この紫式部日記の清少納言評の激越な文章が一転し、そのまま深沈たる内省の文章にひきつがれている」とした上で、この一文に続く叙述に対し「この文章を一読し、あらためて前置される清少納言評に立ちかえるとき、この評をもっとも肯定しうるのは清少納言自身ではあるまいかとさえ思われる」と判じている(注2)。清少納言が読んだらどう思うかは不明と言うよ

りないが、かように日記の文脈に戻してみる時、清少納言批判は、それ自体を自己目的としたものではないことが明白だということだろう。

この点を踏まえた上で、紫式部日記全体の評価を考え直していきたいと思うのである。

二 和泉式部評をめぐって

清少納言批判が無反省な、批判自体を自己目的とした叙述ではないとしても、自身を内省するために必要不可欠な要素と言えるかどうかは別問題であろう。批判された側の立場で言えば、とんだ言いがかりと見えなくもない。例えば藤本宗利氏が、枕草子を評価する立場から「この激烈な文章のお蔭で、清少納言と聞くと、さして深からぬ漢才をふりかざして、さかしらに振舞う嫌な女というイメージが定着してしまった」と嘆くのは(注3)、無理からぬことと思われる。

問題とすべきは、批判自体を自己目的としたのではないとすれば、この批判をすることにどれだけの必然性があったのかということになる。これを考える手がかりとして、この藤本氏の述べるところに、引き続き耳を傾けてみることにしたい。

それにしても「よく見ればまだいと足らぬ」とあって、つまりは「あの女より私の方が上よ」と主張しているわけで、相当に強い自意識の持ち主が書いたということが明瞭です。さらに「そのあだになりぬる人の果て、いかでかは良くはべらむ(＝そんな風流ぶってばかりいる人の末路が、どうして良いものであろうはず

がありませぬ」と吐き捨てるわけで、こうなるともう、憎悪むき出しの罵詈雑言とでも言うべきで、とうてい批評などという理性的な書き物とは言えないでしょう。

この清少納言への悪口に先立って、和泉式部を評したくだりにも、和泉の歌人としての力量に触れて「恥づかしげの歌詠みやとおぼえはべらず（＝私から言わせれば、こちらが気がひけるほどの本格的な歌人とは思われませぬ）」と言い切っています。どうやら清少納言や和泉式部を云々するよりも先に、この書き手の、強すぎる自意識の方が問題視されねばならないということが、明らかにあります。（注4）

日記の文脈から切り離して清少納言批判を取り上げることが不当であることは、前節で既に述べた。藤本氏の批評はあくまで枕草子を擁護する立場からのものなので、言葉尻を捉えて反論するために、これを長く掲げたわけではない。注目したいのは、清少納言批判を否定的な印象で捉える時、それに先行する和泉式部評もまた、同様に否定的な印象のものと見えてくるという指摘である。

だとすれば、この日記における和泉式部評の意味合いを考えてみることで、逆に清少納言批判がどれだけ必要な批評であったかを捉える糸口と出来るのではないか。少なくとも、徹頭徹尾、辛辣に過ぎる清少納言批判よりは、和泉式部評の方が取り付く島はありそうに思える。

既に前節で、清少納言批判とともに掲出済みであるが、改めて和泉式部評の部分のみを掲げ直してみたい。

(A) 和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。(B)

されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。(C) うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり。(D) 歌は、いとをかしきこと。(E) ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みさまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。(F) それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりあたらむは、いでやさまで心は得じ。(G) 口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすちにはべるかし。(H) 恥づかしげの歌詠みやとおぼえはべらず。

(二〇五頁)

一文ごとに記号を付してみた。一見して、良い評価と悪い評価とが交錯しながら進む文章になっていることがわかる。(A)で褒め、(B)で貶し、また(C)で褒め、(D)で別のことを褒め、(E)で褒め続け、(F)で批判に転じ、(G)で貶し、(H)で貶して終わるという流れになっている。また、大きく分けると、(A)～(C)が手紙のやり取りについて、(D)～(H)が和歌についての評価ということになる。もとより、当時の手紙は歌が詠み添えられるのが普通であったから、両者が完全に分離できる質のものであるかどうかは、検討の余地がある。と言うより、そうした観点から特に注目したいのが(B)である。

「されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」。この批判が和泉式部の恋愛遍歴を指していることは動かないだろう。それは事実を踏まえている分、当時の読者にとっても協調しやすい、説得力を持つ批判だったと思われる。ところが、この批判は(A)と(C)との連続性に、いささかの動揺も与えていない。むしろ、(A)から(C)

への一連なりの文の中に、挿入句的に挟まれているのが(B)であると見えるのではないだろうか。

では、この(B)を別にして考えてみよう。(A)と(E)で良い評価を並べたのに対し、(E)で意識した「まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ」を根拠に、悪い評価を続けていくのが(F)と(H)だという、二つの部分に大別し直せることになる。つまり、この和泉式部評において、手紙と和歌とは別個の観点となりきっていない。「まことの歌詠みざま」でないことは、(F)と(H)では和歌の詠み手として致命的に扱われているのに、(D)(E)ではあえて不問に処されているという、和歌を巡った評価としては、一貫性を欠いた論じ方になっているのである。

何故、そうなるのか。ここに(B)を支える事実の重さが意識されていると見たいと思うのだ。手紙のやり取りと、そこに詠まれた歌とは、和泉式部の恋愛遍歴においてこそ、一括りにして、その価値を認められるべきものであったと考えるからである。

私は以前、この紫式部日記における、女郎花を介した紫式部と道長との歌のやり取りと、和泉式部日記冒頭における、橘の枝を送られた和泉式部と師宮との歌のやり取りとを比較して、和泉式部のそれが、師宮との身分差を動揺させる、恋の物語の始発にふさわしいものであると論じたことがある(注5)。今、それをこの和泉式部評に合わせて捉え直すなら、橘の枝を送られたのに対し、これと結びつく古歌の「昔の人の袖の香」を飛び越えて、その同じ枝にとまる「ほととぎす」は「同じ声」かと問いかけていく、(E)「まことの歌詠みざま」らしからぬ和泉式部の歌が、師宮を動揺させ、(B)「けしからぬかたこそあれ」と評される彼との恋を可能にしていたということになるかと思う。言い換えるなら、(B)を中央に置

くことで、(A)と(C)は(D)を引き出し、(E)を成り立たせる根拠となっている。その文勢を離れたところで、ようやく(F)の批判に転じることが可能になったという図式を読み取れるのである。

そう考えてみると、(H)「恥づかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず」という最終的な批判の文言は、実は(B)「和泉はけしからぬかたこそあれ」という非難とぶつかり合って、逆に生き生きとした和泉式部像を浮かび上がらせる仕掛けとなっていると見えてくるのではないか。無論、どちらも批判の文言である以上、単純に紫式部の共感を示すものと読むことは出来ない。けれども、安直な肯定の言葉を回避することによって、いわば毒を以て毒を制する文章の組み立てによって、この和泉式部評は、和泉式部という女性のリアルな存在感を確認するものになっていると思うのである。

否、まだ、これが結論ではない。

煮え切らないようだが、このように解釈してみても、紫式部は和泉式部を好ましく思っていなかったという可能性を、否定しきれたわけではないと思っている。と言うより、ここで大切なのは、和泉式部が評価されているかどうかではない。それよりも、この和泉式部評が和泉式部評として、額面通りの評価の言葉で閉じていないということを言いたいのである。この和泉式部評が、ここだけで独立して閉じていないということは、紫式部日記全体の価値観を揺るがす方法となっているのではないかと、考えてみたいのである。

以前に和泉式部日記の冒頭と紫式部日記の女郎花をめぐるやり取りとを比較してみたことがあると述べた。それは、次のような場面である。

渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ちぬに、殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらせたまふ。橋の南なるをみなへしのいみじうさかりなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわるからむ」とのたまはすることに、硯のもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに

露のわきける身こそ知らるれ

「あな、疾」と、ほほゑみて、硯召し出づ。

白露はわきてもおかじをみなへし

こころからにや色の染むらむ

(一四二―一四三頁)

土御門邸の情景を描くところから始まる日記冒頭近く、作者自身とその主である藤原道長とが、初めて具体的な姿を現わす場面でもある。女郎花が女性を想起させる花であることは言うまでもあるまいが、それを差し入れることで、道長は自家の女房たちの反応を試そうとしたのだろうか。

紫式部の歌が特別意表をつくものでなく、道長もまた常識的な返歌をするというこの場面が、両者の主従関係をいささかも動じさせるものでないことは、かつて論じたとおりである。では、それを、この冒頭近くにわざわざ描く理由は、どこにあったのだろうか。

無論、事実をありのままの順序で描いた結果だと言うことは容易い。ただ、この挿話によって何かが始まっているわけではない。描かれているのは、道長の、主として理想的な姿であるという、それ

以上でも以下でもない。つまるところ、道長の栄華の記録という、この日記の目的に忠実であるという以外の意味を、この場面に見出すのは難しいのではないか。

問題としたいのは、そうした叙述に、作者がどれだけ自足していたのかということだ。「あな、疾」。道長は、自家に集めた女房の、迅速な対応ぶりに満足しているように見える。けれども、その満足が作者自身をも満足させたのかどうかは描かれない。描かれないままに、作者は記録者の役目に戻っていく。その役目はおそらく、道長によって与えられたものだ。それを断ることが可能だったかどうかはわからないが、引き受けた以上、それに従っていくというのがおそらく、彼女の姿勢だったのだろう。だが、そうである限り、いかに源氏物語の作者と言っても、すべての場面は道長の価値観の側に収斂していくよりない。道長が時代の主導権を握った。描かれるべきなのは、その絶対的な現実だからである。

その現実の中であって、紫式部はこの日記を書くことの意義をどう確かめることが出来たのか。ここに問題は、先程来の和泉式部評の問題に重なってくることになる。「和泉はけしからぬかたこそあれ」。この批判が同時代的に説得力を持つということは、それが道長が（道長でなくても良いのだが）主導する現実が、彼女をそうした価値観の枠の中に押し込めようとするものであったというに、ほかならないであろう。その現実の価値観に唯々諸々と従うのではなく、その枠組みからはみ出すような存在感を確かめるといのが、和泉式部評のあり方ではなかったか。そうやって、現実を描いているはずの日記全体の価値観を揺るがすことが、紫式部にとっては自身の内省と一体となっていく。一見、他者の批判へ向かうかと思える現実観察で、より大きな現実の枠組みと対峙し直すことによって、

現実逃避とは異なる、自己の内奥の省察に向かおうとしている。それがこの日記作者の矜持であったと思われるのである。

三 相反する個性の親和力

紫式部日記において他者を批判すると見える文脈が、それ以上に作者を閉鎖し、作者が描くことを求められた現実を、揺さぶることで自身の内省へと向かおうとするものであることを、和泉式部評から考えてきたつもりである。

見通しとして言うなら、清少納言批判にも、同様の論理を当てはめることが可能だと思う。そもそも道長の要請でこの日記が書かれているのだとしたら、定子サロンの旗頭であった清少納言を、高く評価するということは考えられなかったに違いない。そういう意味では、言葉の裏を読んだ方が、作者の真意に近くなる可能性すらある。例えば「よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」とは、よくよく批判的に見ない限り、非難する材料が見つからないと言っているようなもので、むしろ清少納言の活躍の肯定を前提とした文言だったのではないか。

もとより、この日記では彰子サロンの正当性が、疑いようもなく主張されている。その主張に、作者の嘘が混在しているわけではなからう。紫式部が清少納言を否定することが、彼女の同僚の女房たちを勇気づけるといふ側面があった可能性も、否定は出来ない。ただ、だからと言って、一方的に定子方を敵視することは、道長にとっではともかく、彰子や、彼女に近侍する女房たちにとって、どれだけ必須のことであったのか。現実的には道長の思い通りになりつつあるからこそ、その文脈に収斂しきらない事柄の存在感を確かめよ

うとする。紫式部日記において、清少納言批判があえて展開されるのは、道長の栄華にだけ結びつくこと、すなわち、この日記に記録されていく現実の外側に、自分たちの存在意義を見定めようとする営みであったのではないかと、考えたいのである。

とは言え、その根拠として、紫式部の清少納言に対する共感を、直接的に読み取ろうとするのは、いささか無理が大きいとも感じられる。紫式部と清少納言とは、やはり明らかに相反する個性の持ち主である。だから、紫式部は清少納言を意識しただろうし、それが敬意と言うよりは反発に近かったことも、想像に難くない。が、さればこそ、その親和性もまた、おのずから掘り起こされようとしているのが、この日記なのではないか。清少納言批判を文脈の上から必然的なものと位置付け直すにあたり、最後に、その点を考えていくことにしたいと思う。

源氏物語の作者による日記。この形容が、この作品の評価を難しくしているというのが、本稿の問題意識の出発点であった。それは逆に言えば、源氏物語と重ね合わせて理解したくなる叙述が、この日記中に散見されるという意味でもある。その代表として、作者の内省の行き着くところとしての道心を掲げていることは、さほど恣意的な指摘ということにもなるまい。次に掲げるような具合である。

いかに、今は言忌みしはべらじ。人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらむ。世のいとほしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず。ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる。それに、やすらひはべるなり。としもはた、よきほどになりもてまかる。

いたうこれより老いほれて、はた目暗うて経よまず、心もいとどたゆさまざりはべらむものを、心深き人まねのやうにはべれど、いまはただ、かかるかたのことをぞ思ひたまふる。それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひはべらじ。さきの世知らるることのみ多うはべれば、よろづにつけてぞ悲しくはべる。

(二二三頁)

いわゆる消息文の部分の終盤近く、日本紀の御局とあだ名されたことに触れた先に展開される感懐である。わずかな漢学の才を示すことにも用心する作者が、逆に開き直ったように、「人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらむ」と仏典に近づくことを願っていくくだりは、例えば、紫の上を失った光源氏が仏道を希求する心情と響き合うものがある。

臥しても起きても、涙の干る世なく、霧りふたがりて明かし暮らしたまふ。いにしへより御身のありさま思しつづくるに、「鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに來し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな。今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ。ひたみちに行ひにおもむきなんに障りどころあるまじきを、いとかくをさめん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくや」と、ややましきを、「この思ひすこしなのめに、忘れさせたまへ」と、阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ。

(源氏物語 御法卷)

こうした切実な道心の表出は、おそらく清少納言の価値観とは相容れないものである。枕草子に記されるのは、例えばこんな叙述だ。

説経の講師は顔よき。講師の顔をつとまもらへたるこそ、その説くことのみたふとも覚ゆれ。ひが目しつればふとわするゝに、にくげなるは、罪や得らんとおぼゆ。このことはとゞむべし。すこしとしなどのよろしき程は、かやうのつみ得がたのことはかき出けぬ。今は罪いとおそろし。

又、たふとき事、道心おほかりとて、説経すといふ所ごとに、いきゐたるこそ、なほこの罪の心には、いとさしもあらでと見ゆれ。

(枕草子 説経の講師は)

いかにも、という自由闊達な口吻である。清少納言の方が紫式部を意識したはずはないのだが、あたかもひたすら道心に傾斜する紫式部を揶揄するかのよう、「いとさしもあらでと見ゆれ」とまとめられているのを見ると、この両者の差異は決定的と言うしかない。どちらが良いということではなくて、好みがはっきりと分かれる。そういう関係だと見て良いであろう。少なくとも、それが源氏物語と枕草子という二つの作品の色合いを大きく分けるものとなっていることは、改めて指摘するまでもないと思う。

だが、源氏物語と枕草子、紫式部と清少納言という対置が自然なことだとして、源氏物語と紫式部とが完全に重なるものなのかと言うと、なお、注意を要するように思われる。

源氏物語の光源氏は、物語の中でついに出家する場面を描かれないう。その限りで、あくまで俗世の側にとどめ置かれ続ける主人公な

のだが、にも関わらず、この御法巻での姿は、彼の望んだ理想の出家に近づいていくものと位置付けられていると見えよう。覚悟のない出家では、かえって心が乱れることが多く、往生はかなわない。その理屈が彼を現世に引きとどめてきた。しかし、「いとかくをさめん方なきまどひにては、願はん道にも入りがたくや」という理由で、「この思ひすこしなために、忘れさせたまへ」と「阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ」姿には、もはや仏道に傾斜する以外の選択肢が閉ざされているからである。

これに対し、紫式部日記の叙述は、いささかねじれている。「世のいとはしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず」と、道心が堅固なことを表明しておきながら、「ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる」と、自分の意のままにならぬ時間を思って躊躇する。また、そこから改めて「としもはた、よきほどになりもてまかる」「これより老いほれて、はた目暗うて経よまず、心もいとどたゆさまさりはべらむものを」と、道心に傾く正当性を確認していきながら、「またかならずしもかなひはべらじ」「さきの世知らるることのみ多うはべれば、よろづにつけてぞ悲しくはべる」という絶望感へと、すり寄っていつてしまふのである。

こうしたあり方は、消息文の最後を「かく世の人ごとうへを思ひ思ひ、はてにとぢめはべれば、身を思ひすてぬ心の、さても深うはべるべきかな。何せむとにかはべらむ」(二一四頁)と結んでいるのと、照応していると言って良いだろう。すなわち、清少納言批判も含めて、数多の女性たちを批評することを通じての現実との対峙の姿勢が、逆に自身が道心の側に逃げ込むことを拒絶させている

のだと考えられる。そして、そうであることによって、紫式部は、道長が主宰する現実の記録者の役目に戻っていくのである。

このようにして見てくると、紫式部日記の筆致は、源氏物語的な視点を多く内包しつつも、現実を記録するという大前提のゆえに、その作品世界を自由に操作できる物語の場合と違って、自身の叙述自体との格闘が宿命づけられているという印象があるのではないかと思う。そして、その格闘の末に、自身を「罪深き人」と捉えていることに、着目したいと思うのである。

出家道心を願う思いが叶わないに違いないと絶望に転じる時、紫式部はその機制を「それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひはべらじ」と述べていたのだった。ここから改めて、先の枕草子の叙述に目を向けたい。道心が過ぎる人に対する清少納言の揶揄の言葉も「又、たふとき事、道心おほかりとて、説経すといふ所ごとくに、いきるたるこそ、なほこの罪の心には、いとさしもあらでと見ゆれ」となっていて、「罪の心」が意識されている。これは偶然の一致だろうか。

繰り返すようだが、紫式部と清少納言とは、同じ「罪」という語を使っている、そこに込めた思いには大きな違いがあると見ておいた方が良いのだと思う。紫式部がどれだけ清少納言を意識していたのだとしても、かような枕草子の細部までも拾い上げて「罪」を語ったと見るのにも無理がある。だが、紫式部日記が動かしがたい現実の記録であることで自身の叙述自体との格闘を宿命づけられていたのと同様に、枕草子もまた、動かしがたい定子方の零落という現実を前にしながら、なお華やかな定子サロンを活出することに挑んでいたとするなら、その異なる個性の二人の作者が、おのずから同じ「罪」の語をみずからに発見したことの意味は軽くないと言

うべきだろう。そこには、同じ手強い時代の現実と真摯に対峙する中で、二つの抜きん出た才能が、彼女たちの意図を超えて、強烈な個性相互の親和力を発揮していると感じられるからである。

最初にも示した通り、紫式部日記における清少納言批判が、紫式部の清少納言に対するライバル意識を含むものであることは否定しきれない。意識するというばかりでなく、一定の敵意や悪意もあったかもしれない。しかし、そうだとしても、清少納言への批判は、それ自体を自己目的としたものではない。道長の栄華の記録者という役割を負わされた紫式部が、道長の価値観のみに収斂していくことに抗うように、いわゆる消息文の部分を展開していく中で、必然的に取り上げられてきたのが、清少納言への言及だったことを考えてきたつもりである。

確かにその批判は辛辣を極めるが、だからと言って、その批判により潰れる程度の存在感しか、紫式部が清少納言に感じていなかったとしたら、逆に取り上げるに値するとは考えなかつたであろう。その個性が大きく異なる以上、安直な共感があつたと強弁するべきではないと思うが、それだけの信頼はあつた。その信頼の上に展開されているのが、紫式部日記の清少納言批判なのだと思う。

稿を閉じる前に、以上を踏まえて、紫式部日記の中からもう一箇所を掲げておきたい。清少納言批判に続き、「かく、かたがたにつけて、ひとふしの、思ひ出でらるべきことなくて、過ぐしはべりぬる人の、ことに行末のたのみもなきこそ、なぐさめ思ふかただにはべらねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひはべらじ」と綴った、その一文に続く場面である。

その心なほ失せぬにや、もの思ひまさる秋の夜も、はしに出でるてながめば、いとど、月やいにしへほめてけむと、見えたる有様をもよほすやうにはべるべし。世の人の忌むといひはべる鳥をも、かならずわたりはべりなむと、はばかられて、すこし奥にひき入りてぞ、さすがに心のうちにはつきせず思ひつづけられはべる。

風の涼しき夕暮、聞きよからぬひとり琴をかき鳴らしては、「なげきくははる」と聞きしる人やあらむと、ゆゆしくなどおぼえはべるこそ、をこにもあはれにもはべりけれ。さるは、あやしう黒みすすけたる曹司に、箏の琴、和琴、しらべながら、心に入れて、「雨降る日、琴柱倒せ」などもいひはべらぬままに、塵つもりて、よせ立てたりし厨子と柱とのさまに首さし入れつつ、琵琶も左右に立ててはべり。大きな厨子一よろひに、ひまもなく積みてはべるもの、ひとつにはふる歌、物語のえもいはず虫の巣になりたる、むつかしくはひ散れば、あけて見る人もはべらず。片つかたに、書ども、わざと置き重ねし人もはべらずなりにし後、手ふるる人もことになし。それらを、つれづれせめてあまりぬるとき、ひとつふたつひきいでて見はべるを、女房あつまりて、「おまへはかくおはすれば、御幸ひはすくなきなり。なでふをんなが真名書は読む。むかしは経読むをだに人は制しき」と、しりうごちいふを聞きはべるにも、物忌みける人の、行末いのち長かめるよしども、見えぬためしなりと、いはまほしくはべれど、思ひくまなきやうなり。ことはたさもあり。

(二〇七—二〇八頁)

憂愁の思いを抱える紫式部が、ふと夫が生前に読んでいた漢籍を

紐解く。すると周囲の彼女に仕える女房たちが、女性の身で漢籍などを読んでいるから薄幸なのだと言口を言う。昔は経典ですら、漢字で書かれているから女性が読もうとするのは咎めたものなのだと申す。これに対して紫式部は、そうした自己規制をしたからと言って、長生きした例など見ないではないかと言いかけてやめる。思いやりのない反論だから。実際、それもそうなのかもしれないと思うから、と。

「さばかりさかしだち、真名書き散らしてはべる」と清少納言を批判した紫式部が、ここでは逆に「なでふをんなが真名書は読む」と批判されている。清少納言の未来を「そのあだになりぬる人のほて、いかでかはよくはべらむ」と捉えたのと似て、自身の現在を「おまへはかくおはすれば、御幸ひはすくなきなり」と把握されている。紫式部の意識としては、自分と清少納言とは大きく異なった存在なのだろうが、周囲から見れば、同じ穴の貉ということか。その手痛い批判を甘んじて受け入れているのも、清少納言を痛烈に批判したことに対する、紫式部なりの責任の持ち方だったのだと思われる。

注

- (1) 紫式部本文の引用・頁数は、小学館完訳日本の古典『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記』（藤岡忠美・中野幸一・犬養康 校注・訳 昭59）による。以下同じ。
- (2) 秋山虔「ふたりの才媛」『王朝の文学空間』東京大学出版会 昭59)
- (3) 藤本宗利「滅びの後」『枕草子をどうぞ―定子後宮への招待』新典社選書 平23)

(4) 注(3)に同じ。

(5) 拙稿「歌の重さ―和泉式部日記の姿勢―」『常葉国文』第二十号 平7・11)